

SHIGA DOYU



創立40周年記念誌  
滋賀県中小企業家同友会



## CONTENTS

### 祝辞

代表理事 .....	1
中同協会長 .....	2
滋賀県知事 .....	3

### 創立40周年座談会

滋賀同友会40年の歩みから明日を語る .....	4
--------------------------	---

### 滋賀県中小企業家同友会の歩みと組織

1979年度～1989年度 .....	10
1990年度～1999年度 .....	11
2000年度～2005年度 .....	12
2006年度～2010年度 .....	13
2011年度～ .....	17

### 創立40周年のあゆみ

1999年～2019年 .....	20
-------------------	----



## ごあいさつ

### 滋賀県中小企業家同友会 創立40年を回顧して

滋賀県中小企業家同友会 代表理事 蔭山 孝夫

京都中小企業家同友会の勧めで滋賀県に中小企業家同友会が発足したと聞いております。多くの会が西から、つまり京都からの波及で滋賀の地に普及していますが、滋賀県中小企業家同友会も例外ではなく、西の地より普及しましたようです。

私は滋賀県中小企業家同友会の40年の歴史の半分に関わり活動に従事して来ましたが、またその20年の歴史の内、18年間を代表理事として重責を担ぎ活動出来たことは、会社においても私にとっていい経験となり、その重責とプレッシャーは自社の成長に大いにプラスになりました。

1996年11月に同友会へ入会しましたが、当時は売り上げや利益先導主義で、行け行けどんどんと言う会社でした。当時多くの研修会や業界の会合などもありましたが、そのどれもが机の上では握手をしながら、机の下では足で蹴っていると言うことが多くありました。同友会入会早々に、事務局から勧められて故赤石義博氏(中同協元会長)の講義による合宿に参加し、会社と社員の関係や理念経営の大切さを学び、目からうろこで活動をスタートしました。時を同じくして、経営指針の成文化セミナーに参加し、経営理念を重視した指針経営を始めました。

その後、1999年に副代表理事、2001年に代表理事に就き、土建型経営からの脱皮と題して、北は北海道から南は鹿児島まで全国の同友会に報告に行き、少しでも故赤石氏から学んだ人間尊重の経営者が増え、地元の経済が活性化することを願い、東奔西走した思い出があります。

また、当時同友会の名前はまだ一般にあまり知られておりませんでした。私自身が同友会活動に参加し、企業経営にとって素晴らしい仲間による経営者の学びと実践の場と確信して、会員を増やす活動もしました。当時は東近江地域に数名の会員しかおりませんでした、

強引な増強もしましたが、今では120名を超える支部にまで成長し、地元の経済を支えるまでになりました。同友会の知名度を上げるために、知事初め県庁の幹部なども訪問しました。2003年頃ですが金融アセスメント法制定の運動で、県内の各市町の議会を訪問し、制定の賛成をいただきに廻りました。金融アセスメント法は制定されませんでした、その結果地方銀行はリレーションシップバンキングへと舵を切りました。

2012年には「滋賀県中小企業の活性化の推進に関する条例」の策定にかかわりました。この条例も同友会の大きな支えのもとで成立しました。この20年を回顧しますと、先輩が滋賀に同友会を築いていただき、その同友会をさらに成長期として、組織的にも理念的にも実践的にも成長させることが出来たと思っています。まず同友会の活動で全国の経営者とも同じ席を交えて議論と経営談義をし、自社の企業づくりに活かした事です。そして、大学や福祉団体とも協力し、人がいきいきと生きる地域社会を目指す同友会であることを掲げてきたことです。

代表理事として滋賀同友会を代表し、地元でも経営者のトップとして報道等にも取り上げられ、会社の知名度も上がりました。しかしその反面大きなプレッシャーもありましたが、その結果自社も同友会理念に基づく経営で成長しました。

まだまだやる事は一杯ありますが、あまりにも長い政権は腐敗しますので、この辺で次期の代表に譲り、同友会の活動は大御所から見守りたいと思います。

また事業承継は終わりましたが、同友会の承継は息子2人に引き継ぎました。長男が創立40周年の事業本部長と次男が青年部の元幹事長で活躍して、企業にも脈々と同友会の血が流れて、今後も理念型経営を目指し、50年さらに100年企業を目指し邁進します。共に滋賀県中小企業家同友会の発展を祈願して創立40年の回顧の筆を置きます。





## 祝辞

中小企業家同友会全国協議会 会長

広浜 泰久

滋賀県中小企業家同友会創立40周年および創立40周年記念誌をここに刊行されますことを心よりお慶び申し上げます。

1957年の日本中小企業家同友会(現・東京中小企業家同友会)創立以来、その志高く熱い思いは全国に広がり、1969年の中小企業家同友会全国協議会(中同協)設立を経て、1979年に全国21番目の同友会として貴会が創立されるに至りました。

当時、日本は高度経済成長期を経て安定成長期にあり、貴会は設立時57名の会員から3年後には421人に到達し、1千名を展望するまでに勇躍されました。

また、中同協の全国行事である「障害者問題全国交流会」(1983年)、「中小企業地球環境問題交流会」(2001年)、「人を生かす経営全国交流会」(2008年)の、いずれも第1回開催地として名乗りを上げ、成功を収めています。さらに、経営指針成文化運動でも充実した内容が全国から着目され、経営指針成文化運動の交流会開催を呼びかけるなど、運動の牽引役を担ってこられました。

政府は2010年に「中小企業憲章」を閣議決定し、「中小企業は、経済を牽引する力であり、社会の主役である」と位置づけたように、日本経済と地域経済・社会の担い手として私たちの役割は重要さを増しています。「地方創生」政策促進の方向の中にあって、私たちは地域経済、地域社会が存続成立してこそ国が成り立つという観点と、平和の中でこそ中小企

業が繁栄し豊かな社会がつかれることに確信をもち、中小企業振興基本条例制定の運動をともに推し進めましょう。

時代はいま、企業がもつ社会的役割を発揮すべき時として、地域・社会の課題など様々な面から問いかけています。私たちが取り組んでいる学びと運動は、創立以来、<sup>あまた</sup>数多の会員経営者が実践を通じて築き上げてきた賜物です。その財産を生かし、学びあう仲間の輪を広げ、切磋琢磨しながら時代の要請に応えていきましょう。

本年、中同協は設立50周年を迎えます。各地の同友会は、「三つの目的」の総合的な実践活動をすすめて、全国5万名会員達成に向けて取り組んでいます。貴会におかれましては、全国上位の組織率を力として、「地域法人10%、1,400名」を目指して躍進されることを願うものです。

結びに、創立40周年を機に滋賀県中小企業家同友会が益々のご発展を遂げ、今後も全国の運動を牽引されますよう、あわせて会員皆様のご健勝と企業のご隆盛を心より祈念申し上げます。



## 祝辞

滋賀県知事

三日月 大造

滋賀県中小企業家同友会が創立40周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

貴会は、昭和54年1月に、本県中小企業の経営基盤の強化、経営者の資質向上を目的に結成されて以来、「よい会社・よい経営者・よい経営環境」の3つを目標に掲げ、役員の方々をはじめ、会員の皆様の一致団結により、600名の会員を擁する組織にまで成長を遂げられました。県内中小企業と地域経済の発展に多大の貢献をいただいておりますことに深く敬意を表します。

昨今、自国第一主義による世界の分断や、米中貿易摩擦等海外情勢に不透明感が見られると共に、我が国においてもSociety5.0の進展をはじめ経済・社会情勢が大きく変革しています。改正出入国管理法も施行され、いよいよ多くの外国人と「共に暮らす」時代が到来しました。

本県では、全国に先駆け、多国籍、多文化共生の滋賀をつくる取組を推進し、健康な社会を構築していく中で、人材確保や確実な事業承継の問題等にも取り組み、「健康しが」の実現を目指してまいりたいと思います。

県では、様々な変化を前向きにとらえながら、将来にわたって力強く持続的な展開を遂げていくため、「変わる滋賀続く幸せ」を基本理念とし、2030年までを計画期間とした新たな「滋賀県基本構想」をSDGsの視点も取り入れながら策定したところでございます。

また、本県における産業振興施策を総合的に推進するための中長期指針である「滋賀県産業振興ビジョン」についても、未来と世界をしっかりと見据えて改定に向け取り組んでいるところであり、「滋賀県中小企業の活性化の推進に関する条例」に基づく施策の展開と合わせ、地域経済を支えていただいている中小企業の健全な発展に向けて尽力しているところでございます。

貴会は、発足当初より、技術や経営等に関する知識を深めるため、自発的に実践活動に取り組んでこられました。「平成」から新しい時代への到来も目前でございます。今後とも貴会の時代を先取りした活動により、地域経済の発展に寄与いただくことに大きく期待しているところであり、これからも「世界に開かれ、世界とつながり、世界から選ばれる滋賀」を皆さんとともにつくってまいりたいと存じますので、お力添えをよろしく願いいたします。

結びに、貴会の創立40周年という大きな節目を契機に、なお一層の御発展を遂げられますよう祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。



# 滋賀同友会 40年の歩みから明日を語る

2018年12月7日(金) 14:00~15:45 ● クサツエストピアホテル

Anniversary



## 参加者

岩部 英世 法面プロテクト(株)  
取締役/滋賀同友会 相談役

坂田 徳一 (株)坂田工務店  
代表取締役/滋賀同友会 相談役理事

蔭山 孝夫 滋賀建機(株)  
会長/滋賀同友会 代表理事

宮川 卓也 宮川バネ工業(株)  
取締役会長/滋賀同友会 副代表理事

永井 茂一 (株)ピアライフ  
代表取締役/滋賀同友会 副代表理事

## 司 会

廣瀬 元行  
滋賀同友会 専務理事

**廣瀬** 本日は、創立40周年の座談会にお集まりいただきまして、ありがとうございます。代表理事、委員長、支部長など、たくさんのご経験をしてこられた皆様に、入会された当時の思い出や役員時代の取り組み、そして、どのような企業づくりをされてきたのかをお話いただければと思います。

## 創立から2000年までの 組織と特徴

**廣瀬** 滋賀県中小企業家同友会(以下・滋賀同友会)、1979年1月17日に57名の会勢で全国21番目に発足しました。それから、3年ぐらいは会員数を倍々ゲームで伸ばしていき、1982年には会勢421名になりました。

「誇り高い経営者集団を地域につくる」「1000名の同友会をつくる」というスローガンのもと、裸になって本音で語り合い、自主・民主・連帯の精神を経営に生かそうと呼び掛け、大津と湖南地域で会員がどんどん増えていきました。

当時の代表理事は横井弥一郎氏(故人)で、大津市を中心に200名近く増強され、湖南エリアと大津が競争をしながら一気に会員数を増やしていました。私が入局した1984年は、創立当初の倍々ゲームから、会員数が減り359名でした。そこから新しい支部づくりが取り組まれ、創立10周年の1989年3月には、過去最高の464名に会勢を伸ばしました。

創立10周年の記念誌には、これまでの総括として、急成長ゆえの組織の弱さ

を払拭できなかったことや、企業づくりと地域に貢献する同友会運動の再確認が必要であるとか、学べる例会づくりの定例化、事務局任せにしない支部中心の自主運営、同友会らしい社員共育、政策、労使見解の精神に学ぶ活動を会の中心にすること等、今とあまり変わらないことが語られています。創立10周年のときに、するべきことは見えていたわけです。

2000年以降、理念型の同友会づくりへ大きく舵が切られ、活動の中身も多岐にわたって拡がります。

岩部さんは1996年5月より代表理事に就かれ、理念型の同友会づくりの土台を築いていただきました。入会当時の思い出や代表理事になって取り組まれた同友会づくりについてお願いします。

## 歴史と理念を学ぶことから スタート



岩部 英世／法面プロテクト(株)

**岩部** 入会して10年目のときに、当時の事務局長から突然言われて、1～2年の繋ぎのつもりで代表理事を引き受けました。私自身10年入っていても、同友会活動自体をあまりやっていませんでしたし、そもそも代表理事になるとは思っていませんでしたので、具体的にどうすれば良いかなどは考えてもいませんでした。

代表理事になる前年に滋賀で中同協の第27回定時総会が開催され、滋賀同友会も成長したと思っていましたが、代表理事になって各支部へまわり現状を把握していくと、これはもう全然違うと気付きました。支部の役員が1～2年でコロコロ変わる、例会の出席率が悪く仲良しクラブのような雰囲気のある支部もありました。正直どうすれば良いのか見当もつかないというのが実感でした。

とりあえず、リーダーを育てていくことから始めようと、赤石義博さん(中同協元会長・故人)を講師に招いて、これでもかというぐらい同友会の歴史や理念を学ばせてもらいました。この繰り返しで参加者に同友会を理解してもらえ、徐々に理念型の同友会に変わっていきました。

**廣瀬** 当時の同友会での奮闘ぶりがみえるわけですが、岩部さんが代表理事に、私が事務局長になった1期目の1996年11月に蔭山さんが入会されます。第10回滋賀県経営研究集会のゲスト参加がきっかけでご入会いただきましたが、同友会と

出会ってどんなイメージを持たれましたか?

## 正しい経営姿勢への気づき



蔭山 孝夫／滋賀建機(株)

**蔭山** 建設業界で勉強する会がなかった当時、大槻眞一さん(当時・県工業技術センター所長)から「こんな会があるから行ってみないか?」とご案内をいただいたのがきっかけです。分科会のグループ討論で、私の話を聞いてもらえたことが気持ち良かったので入会しました。

経営体験を報告するだけの会だと思っていましたが、誘われるままに赤石義博さんを講師に迎えた合宿研修会に参加して「えらいところにきてしまった」と思いました。最初は赤石さんが何を言っているのか全然分からなかったのですが、経営理念や労使見解を学び、会社でそういうものだと、今まで好き勝手やってきて恥ずかしいことをしてきたと気付きました。それから、経営指針の成文化セミナーを受講し、社員と一緒にやっていたら、わが社の幹部7～8人にも成文化セミナーを受講してもらいました。今、20年目の経営指針書ができて、当時の理念を朝礼や会議でもやり続けています。その結果、売り上げも順調に伸び、社員も増えました。勉強ばかりではダメ、実践も伴わなければいけません。あの時、同友会に入ってから良かったと改めて思います。

**廣瀬** 岩部さんが組織をなんとかしようと、中同協から赤石さんを繰り返しお招きして、同友会理念と人間尊重の経営を徹底的に学び、蔭山さんや坂田さんがノブ

ンを受けて発展させていただきました。蔭山さんが2001年度に代表理事に就かれて、すぐに取り組んだのが「金融アセスメント法」の制定運動でした。早期制定の署名を集めると共に、地方議会から国会へ意見書をあげる取り組みを進め、2003年12月には県議会と全市町村で早期制定の意見書が採択されました。この頃から金融機関との懇談会も行い、行政や他団体から滋賀同友会への注目度が大きく高まったように思います。

## 土建型企業からの 脱却めざして



坂田 徳一／(株)坂田工務店

**坂田** 2001年から大津支部長を4年、2003年からは副代表理事をやらせてもらいました。私は現場監督をずっとやっていたので会社経営には携わらずにいましたが、たまたま知り合いの散髪屋で永田咲雄さん(株ビイサイドプランニング 会長)を紹介され、「彼は同友会で勉強してバリバリ活躍している」という話を聞いて入会しました。しかし、例会のグループ討論が嫌で、こんなきつところ無理やと引込み思案になり、しばらくは参加しませんでした。

平成9年、建設業がどんどん倒産していった激変の時、信頼をしていた取引先の倒産で当社も大ダメージを受けました。そんな時に大阪で開催された第30回中同協定時総会に参加して、岩手同友会の会員から「製造業は開発をやるから先行投資をしているが、土建屋は現状維持をしている」と言われ、土建屋から民需に

切り替えようと決意し、思い切って建設業界の勉強会に参加するのを辞めました。

その後、同友会へ積極的に参加しますが、私も蔭山さんと同じで、最初はチンパンカンパでした。理解し始めたのは、経営指針成文化セミナーで東京同友会の奥長弘三先生((有)コンサルタント朋友 社長)の話を聞いてからです。それまでは社員は勝手に育つものだという意識でしたが、自社の歴史を振り返り、先のことを見据え社員と共有することが必要だと気づき、土建型から理念型へと考え方が変わっていきました。

当時の同友会には、新しい会員に対して学びの場に引っ張ってゆく、おせっかいなリーダーが多かったと思います。組織を継続していくためには、経営指針を創る会などで、次代を担う人を育てていくことが必要です。その人の成長と同友会の成長は不離一体だと思います。

**廣瀬** 坂田さんの後を継ぎ、大津支部長に就いたのが永井さんですね。

## 役員を引き受けると 自分も会社も成長する

**永井** 同友会に入って2~3年は、幽霊会員でしたが、支部の会員さんから誘われ例会に出るうちに、支部の組織活性化委員長や例会委員を任されるようになりました。

支部の中で役をやっていくうちに、坂田さんが支部長になり「次の支部長は任せられるから覚悟しとけよ」と言われたのを覚えています。坂田さんの後、支部長をやった4年間は、経営労働委員や共有委員もやっていたので、働く時間の3分の1は同友会をやっていました。会社を離れる時間が多くなって、会社を社員に任せられるようになり、結果的に社員が育って売り上げが伸びたので、良かったと思います。

**廣瀬** 永井さんは、2001年から経営労働委員長に就き、富山同友会の経営指針

を創る会に参加し、滋賀での経営指針を創る会づくりに取り組まれました。その頃を振り返っていただけますか？

## 経営指針を創る会をスタート



永井 茂一 / (株)ピアライフ

**永井** 私も経営指針成文化セミナーを2回受講しました。しかし、経営理念という立派な文章はできたものの、腹落ちしていませんでした。私が経営労働委員長になった当時の成文化セミナーは、東京同友会から講師に来ていただき、経営指針とはこういうものだと教わるというものでした。

そんな時に全国の中で指針創りが進んでいる同友会が宮城にあることを知りました。その宮城同友会に富山同友会の人たちが勉強に行き、宮城方式で指針創りを始めたこと聞き、2001年に二泊三日で半年コースの創る会を、一年半参加しました。富山では、講師を呼ばず、先輩経営者が自らの事も含めて問いかけ合うという素晴らしい指針創りをやっていて、感銘を受けました。

最初の半年は受講生として、翌半年はOBとして、最後の半年は、「なんとかこれを滋賀でもやりたいが、自分だけの力ではなんともできない」と思い、事務局長の廣瀬さんを説得して一緒に参加してもらいました。このことがきっかけで滋賀でも指針創りが広まりました。

**廣瀬** 富山で二泊三日の半年間は身にしみました。お陰様で滋賀同友会事務局の経営指針書を作成し、ほぼ毎年継続して発表し続けています。

2002年には、一泊二日だけの経営指針成文化セミナーを半年コースに切り替え、受講生と講師団で毎回40人前後が参加する、さながら「経営指針バブル」の状況でした。中同協では「理念の滋賀同友会」と呼ばれた時期です。そんな2000年代前半から2005年頃まで、地球環境問題全国交流会の開催、龍谷大学との連携で学外実習生の受入を始め、東近江支部設立、北近江支部設立など活動のウイングを大きく広げました。宮川さんが入会されたのは、2005年1月ですね。

## 同友会と出会って 経営の王道を学ぶ



宮川 卓也 / 宮川バネ工業(株)

**宮川** 大阪から仕事の関係で滋賀にきて、知り合いがいなかったのも、人間関係をつくろうと様々な組織に入りましたが、上下関係が強くて、利権をまもるような、保守的な会ばかりで長続きしませんでした。そんな中「経営者が勉強する会がある」と誘われたのが同友会です。最初は「経営者が勉強するわけない」と半信半疑でしたが、例会で太田堯さん(日本教育学会 前会長 故人)の報告を聞き、すごい人と呼んで勉強している会だなと興味を持ちました。人間の多様性、人はみな可能性があり、自分で育つ力を持っている。その力を引き出すのが、これからの経営者の役割だと、話されること全てが心に響きました。

その次の報告が広島の内装屋さんの若い経営者でした。その人は、過当競争



など色々ある中、医療内装に特化しようと、専門の社員を雇用したことで、古くからいる職人とぶつかってしまいました。その時に、職人一人ひとりから話を聞き意思統一することで医療内装の業界内で地位を築くことができたという話を聞き、この会はずごと感動し入会を決めました。

入会してすぐに経営指針を創る会を受講し、気付きをいただきました。そこで感じたのは、同友会ってすごいことを言っているが、別に特殊なことは何も言っていない。ごく当たり前の人間として王道のことを正々堂々とやっている。今までの自分は、経営者として、それに反する事ばかりしてきたと反省し、経営姿勢を180度変えようと思ったのが出発点でした。

創る会卒業後、入会わずか1年で理事になれと言われたのには驚きました。この会は、上下関係で遠慮することもないし、自分が思っていることは言ってもいいし、やりたいことはやれる。そう思って理事を引き受けたら、いきなり政策委員長を任せられ、地域ビジョンをつくることになりました。同時に全国行事へも参加し、気合いの入った経営者の話を聞き、この人たちのやっておられることを、少しでも真似して、よい会社づくりを実践していこうと思ったところでした。

**廣瀬** 同友会というのは、先進的なことを言っているように見えて、本来の人間としてのあるべき姿、組織のありようを提起している組織であるということが、宮川さんにとって新鮮だったのだと改めて感じました。

宮川さんは2008年に後退した滋賀同友会の立て直しを図るべく組織活性化委員長に就かれますが、滋賀同友会にとって何が一番重要な課題だと思われ、どのようなことを取り組まれたのでしょうか？

## リーマンショックを経験して

**宮川** 政策委員会を楽しくやっていた2008

年にリーマンショックがあって、会勢が686名から607名に減りました。組織活性化委員長を頼まれ、同友会の返事は「ハイ」と「イエス」しかない、引き受けました。

同友会は、いろんなことをやっているが、支部や一般会員のところでは動いていないということが分かって、支部まわりをし出して、支部長や組織活性化委員の話しを聞くことで、現場が回りだし、少しずつ会員数が回復していきました。

5年やったら滋賀同友会の組織づくりの方向性が見えてくるかなと思って、組織活性化をやっていましたが、3年ぐらいで今度は、経営労働委員をやることになりました。

**廣瀬** 2008年のリーマンショックを節目に滋賀同友会は組織を後退させ、ここから一進一退を繰り返します。岩部さんは相談役という立場でしたが、当時の滋賀同友会をどのようにご覧になっていたのでしょうか？

**岩部** 会員が減るということは、同友会が続くかどうかということでもあります。私が代表理事をしていたときも会員が増えないという状態が長く続いていました。バブル崩壊後、失われた10年といわれた時代で、景気が悪いという心理的な影響があって減っているのかなと思っていました。2008年当時もリーマンショックがあって、その影響が大きいのかなと。盛り上がるようなことがないと増強も進まないし、どうしたらいいのかなと悩みました。

特に、会の役員が倒産とかなると、地域自体が同友会に入ったら潰れるという雰囲気になり、会の存続に影響しますので、何があっても潰れない強靱な企業づくりが重要と考えていました。

**廣瀬** 岩部さんが仰っていただいた強靱な企業づくりと関連して、同友会づくりと企業づくりでどのような取り組みをされたか、2010年度から蔭山さんと共に、組織的には厳しい時期に代表理事をお引き受けいただきました坂田さんお願いします。

## 「自主・民主・連帯」の精神を体現



**坂田** 会員が自信を持って他の経営者にすすめられる会にするために、同友会運動と不離一体の経営をしているモデル企業が必要と感じていました。

また、会員からの「会員を何で増やすの？」という質問に「組織が大きくなることによって組織自体がより良くなる」ということを分かりやすく説明し、理解してもらうことも必要です。

同友会での経験が活かした出来事があります。それは、ある団体のイベントで、35社の出展と3000人の来店があったにも関わらず、売り上げがなかったと不満が出たときに「これをやることで知名度は上がった。反省は必要だが、皆がお客さんではなく主人公として一体となって、もっと活動を底上げする事が地域の経済を良くすることではないか。自分は何が出来るかという役割を一人ひとりが持たないと、経営なんて出来ない」としっかり言えたことです。

一人ひとりが主人公だという同友会の理念。「自主・民主・連帯」の精神、それを学んだお陰で、地域づくりに活かしていると感じています。

同友会づくりも企業づくりも、一人ひとりの意識づけ、スポットを当てる取り組みが凄く大事だと考えます。

**廣瀬** 「自主・民主・連帯」の精神の実践は「人間尊重の経営」の考え方の基本になっています。社員との関係づくりに課題意識を持っておられた永井さん、社員との共育ちでモデルとなる取り組みなど、

会社をどう変えてこられたかをお話していただけますか？

## 採用と共育が企業を強くする



**永井** 同友会で色々学び、経営指針書ができて、社員は読んでいない。せっかく目を輝かせて入社してきた社員が数ヶ月経つと、やりがいを感じられないので辞めますと去っていくなど、社員との関係が上手くいきませんでした。会社を良くしていくためには、社員の採用や育成が重要と感じました。

社員共育とは経営指針の浸透のこと、指針があるだけでは会社は良くならない、指針を社員と一緒に実践していく必要があると、社員共育活動に取り組みました。

当時は、社員を教え育てる教育で、学びの場に経営者が参加しない活動でしたが、経営者が自分の経営に対する考えを語るとか、社員に自社の経営理念や働きかいを語ってもらうとか、経営者も社員も共に学べる場をつくっていくと委員会の中で内容を変えていきました。

共同求人活動Jobwayが始まったときは、同友会運動へのお付き合い程度にしか思っていませんでしたし、そもそも中途採用しかしていないし、大学生が中小企業に来てくれるわけがない、新卒採用は無理だと思っていたからです。

でも、共同求人活動に取り組んで分かったことは、新卒を採用する活動とすることだけではなく、若者からみて魅力ある企業をつくるか、中小企業の存在意義を知ってもらう意義があるということが分かるようになり、求人・共育に対する考え、意識が変わってきました。

以前の滋賀同友会では、共同求人活動を誘っても2~3社しか来てくれませんでした。今では、活動の幅が広まり、大学生のインターンシップの受け入れなど、多くの会員さんがこの活動の必要性を感じてくれるようになりました。

自社では、共育委員会に参加してから、今では新卒の採用や障害者の雇用もできるようになりました。

**坂田** 私も、よい経営環境をつくらうと学んでいくうちに、政策や地域の学校と関わることが大事だと気付きました。天津支部では、中学生の職場体験を受け入れ、社員が中学生に自社の役割をしっかりと話せるような企業を増やす活動を続けてきました。**廣瀬** これからも大いに力を尽くさなければならぬ活動です。

宮川さんは2009年4月には創立30周年事業でジャズフェスを仕掛け、10月には滋賀同友会モデル企業認定制度「滋賀でいちばん大切にしたい会社」アワードを提案されます。

2012年度からは経営労働委員長として経営指針を創る会のクオリティ向上や「月刊共育ち」創刊に尽力されました。わずか5年程度の間でこれだけのことを仕掛け、取り組んでこられるなど普通では出来ないことだと思いますが、それぞれの取り組みについて、意義と成果を振り返っていただけますか？

## いいと思うことは どんどんやる



**宮川** 周年事業といえばホテルにたくさん集まってもらって乾杯というのが一

般的だと思いますが、それに違和感があって、そんな時代ではない、自己満足をしてはダメ、地域を見ると、商店街が疲弊していたり、若者がどんどん都会に出て行ったりして、このままではダメだということで、文化的な行事をやるとうと東近江市でジャズフェスを開催しました。同友会が全面的にバックアップしたことで大成功を収め、その後毎年開催され、地域活動として、しっかり根付きました。

それから、同友会の一番コアな取り組みである経営労働委員になって、志は高いが継続できる仕組みが出来ていない弱さに気付き、改善に取り組んできました。例えば、創る会では、経営者が一生懸命やっている良さはあるが、どうしてもOB・OGの個人技に頼る部分があり、最小限の共通認識が必要と感じて、用語集などOB・OG向けのテキストを作り、どういう技術をベースにして受講生に向き合っていくのかの意思統一を図りました。

今は、服部兼一さん(服部コンサルタント事務所 代表)に経営労働委員長を引き継いでいただき、指針経営の基礎講座などプロフェッショナルな活動も増えて、良かったのかなと思います。

同友会は、いいと思うことはどんどんやっていい会というのがベースにあったので、そういうことが出来ました。この会は、本当に色々なことを広い範囲でやらせてもらえますし、やらなかったら同友会に入っている意味が無い。もちろん失敗したこともあります。でも、それも大事な勉強だと思いますので、これからの会員さんには、いいと思ったことは、やらないとつたいないと伝えたいです。

**廣瀬** これからの若い経営者にも引き継いでもらいたい取り組みですね。青年部の取り組みについては、いかがでしょうか？



## 青年部でリーダーシップを身に付ける

**蔭山** 2005年に青年経営者全国交流会を滋賀で開催したことが良い思い出です。息子が実行委員長を任せられ、大仕事をやった経験のお陰で、会社でもリーダーシップが取れるように成長しました。

企業と共に成長してってくれる人材にリーダーシップを発揮していただき、今以上の同友会をつくっていただきたいと思います。

**廣瀬** 青年部は関西ブロックや全国で連絡会をやりながら、次代の同友会運動の担い手を目指して、積極的に活動しています。青年部で組織経営を学び、卒業した人たちが支部や委員会のリーダーになっていくという流れを作るためにも、支部や委員会と青年部がそれぞれの強みを活かして一体となる活動が展開できればと思います。

現在の滋賀同友会は、今までの蓄積があって、中同協で組織率11位。2019年に創立40周年を迎えるまさに中堅どころの同友会です。

特徴的な取り組みとして、2012年には滋賀同友会の粘り強い要請を受けて「滋賀県中小企業の活性化の推進に関する条例」が県議会で可決され2013年4月から施行されました。

今後、地域法人の10%、1400名の滋賀同友会として着実に発展していくために何が必要なのか。皆様からご発信をいただきたいと思っています。

## すべての経営者に同友会の存在、理念、真髓を伝える

**坂田** 歴史と理念を学ぶオリエンテーションなどで、同友会の基本的なことを知ってもらおうというのが、退会率も減るので、基

本は大切にしていきたいと思っています。

**岩部** 同友会理念は会員だけでなく、中小企業経営にとって絶対に良いものです。中身は濃いし良いものだから、それをどうやって伝えていけるかが課題だと思います。

**蔭山** 正しいことをやっているのだから、自信を持つ。そして同友会で学び会社を発展させている語り部を増やし、生の声をPRしていくことが大事。企業と同友会は両輪というように、会社が良くなると、同友会も良くなる。私自身「同友会の役員になった人が会社をダメにするようなことがあってはならない」と、プレッシャーを感じながら対外的な発信を続けてきました。年賀状には「滋賀県中小企業家同友会会員」と入れるなど、日常の些細な事から同友会のPRを心がけ、知名度を上げることができたのかなと思っています。これからも対外的な活動を応援していきたいと思っています。

**永井** 滋賀同友会の40年を振り返ってみますと、近年は行政や他団体、地域からあてにされるようになり、金融機関からも地域を支える企業づくりを担ってくれる団体だと目を向けてもらえるようになりました。全国的にも滋賀同友会の運動は素晴らしいと脚光を浴び、活動は広がってきたものの、今後10年20年を見据えて、同友会運動と自社経営を不離一体でやっていく

経営者を増やし、会勢1400名を迎える体制づくりがさらに必要だと感じています。

**宮川** 我々がやるべきことは、県内の14000の経営者全てに同友会運動の良さや正しさを伝えること。その結果少なくとも1割の1400名は同友会の活動に共感するというのが同友会運動50年の歴史が示す実績です。目指すところはそこで、それと同時に入会した人が同友会の真髓に触れずに去っていくことがないように、身近なテーマを語り合い、励ましあい、叱咤激励しあうような、顔の見える同友会運動をやっていくこと。

今はまだ、一部の役員の同友会運動にしかなっていない部分がある。取り組みが全会員のものになって主人公が増えていけば、同友会は力強い前進をし、地域から期待される役割を担える経営者団体になっていくのではないのでしょうか。

**廣瀬** ありがとうございます。40年の歴史を振り返っていただき、あらためて同友会運動と企業経営の不離一体が大事と感じました。是非多くの経営者に同友会の存在を知ってもらい、同友会理念の実現を目指していきましょう。

今日は、貴重なお話を長時間ありがとうございました。

(記録 滋賀同友会事務局 中村香澄)

